

2019年3月11日発行

『**道徳感情論**』における**共感論**

— 共感を必要とする状況、しない状況の比較を通して —

角 田 雅 昭

相模女子大学紀要 VOL.82 (2018年度)

『道徳感情論』における共感論

— 共感を必要とする状況、しない状況の比較を通して —

角 田 雅 昭

A study of sympathy in " The Theory of Moral Sentiments."

Masaaki KAKUTA

Abstract

In this paper, I have discussed Sympathy in Adam Smith's " The Theory of Moral Sentiments ". In particular, I compare the two situations when we judge of the propriety or impropriety of affections of other person, in other words, compare the situation that requires sympathy and the situation that does not require sympathy.

I revealed in this study is what Smith's "peculiar relation" also implies the relation of human peculiar with the function of sympathy. Smith considered that in a situation we do not need any peculiar relation, we do not need sympathy. For example, the great scientific skill or the taste of a painting; all the general subjects of science and beauty, are what we regard as having no peculiar relation to either of us. In addition, Smith thought that it was inevitable that the emotions of the observer and our emotions are asymmetric. Humans have different emotions, therefore, we need certain consideration for each other.

In this study, I revealed three characteristics of Smith's sympathy. The first is to focus on emotional interactivity. In particular, Adam Smith is demanding efforts not only for observers but also for us as a victim. The second is that sympathy does not refer to a perfect match of emotions. The third is his sympathy is cognitive. In short, humans are being created by Nature so that they interact with each other by the existence and behavior of others. Humans must be accepted by society according to the situation. Therefore, Adam Smith insists that humans are required to control our emotions by sympathy.

Key Words : sympathy, Adam smith, " The Theory of Moral Sentiments", peculiar relation, Nature.

はじめに

アダム・スミスの『道徳感情論』において、もっとも重要な概念のひとつが共感 (sympathy) である。人間は弱い生き物であり、他者の力を借りなければ生きていけない。そのため人間は、「社会の中でしか生きられない¹」とアダム・スミスは考えていたのである。

しかし、人間には利己的な面もあるのは明らかである。それまでの道徳哲学では、この利己的な面をどのように克服するかということを課題としていた²。しかし、アダム・スミスは、利己的な面も含めて人間の本性と受け入れることからはじめたのである。

要するに、利己的でありながらも、他者に対して慮ることを可能とするよう人間に与えられた機能、それが共感であると考えていた。アダム・スミスは、このような人間の共感について「状況に適応するように自然 (Nature) によってつくられた³」と述べている。つまり、人間は自らが構成する社会という状況に適応するために、共感という機能を各人が共通して備えるようになったということである。

それゆえ、私たち人間は他者の感情や心的状態などを、同じように感じたり、自分のことのように理解したりすることが、ある程度相互に可能となるのである。濱田はこのような共感について、「市民社会における諸個人間に働く生きた感情⁴」と説明していた。社会で生きなければならない人間誰もが、相互に働く感情 (共感) を有しているということである。

このように、複雑で多層的なアダム・スミスの用いた共感という概念であるが、四つの特徴から説明することができる。第一に、感情の相互作用性である。共感したという場合でも、自分の感情は揺らされるだけでなく、その揺らぎを発信源の当事者に感知されることで、当事者の感情に何らかの影響を与えることになる。このような共感の機能により、人間は他者とともに複雑な社会を営むことを実現してきたと考えていたのである。

第二に、当事者の感情が現れた状況をことさらに問うているのである。当事者の悲しみに観察者が共感を覚えたときであっても、その悲しみが生じた原因 (状況) を、まるで自分のことのように観察者側は経験することが必要であり、それを経ないと「心からの共感を抱くにはいたらない⁵」というのである。共感のためには、「あなたの身にいったい何が起きたのか⁶」と、当事者に聴く姿勢が求められて

いるのである。悲しみなどの感情表出を目にして生じるというよりも、当事者の置かれた状況を知ること、観察者の共感が生じるというのである。こうしたアダム・スミスの共感については「理解⁷」という捉えの方が近いかもしれない。

第三に、共感に適宜性の判断が含まれているのである。観察者は当事者が抱いた感情と、自分自身が共感して抱いた感情が一致した場合には、その当事者の感情が状況に見合っていると感じる。逆に、自分自身の身に置き換えたときに、当事者の感情と一致しない場合には、それを状況と見合っていないことから適切ではないと感じる。それゆえ、適切ではないという場合も、それ自体は共感による判断であり、共感の一面ということになるのである。

第四に、共感という心的現象は瞬時に生じるということである。このことをアダム・スミスは、共感には、利己的な打算が入り込むことが出来ない根拠として述べている⁸。しかしこのことから、当事者の状況を想像して経験するということや、状況における当事者の感情の適否の判断も、その瞬時に含まれることになると考えられる。

そして、アダム・スミスはこうした適否の判断を行う状況については、二種類存在すると述べている。一つが、感情を動かした原因や状況が、その当事者や観察者 (自分自身含めて) 自身と「固有の関係」がない場合である。もう一つは、当事者か観察者 (自分自身含めて) 自身と「固有の関係」がある場合である。この「固有の関係」とは、当事者や観察者の身に起きた不運や加えられた危害などの直接的な関係のことと説明されている。

そのため、当事者や観察者自身と「固有の関係」がない場合、アダム・スミスは、共感を必要としないと論じているのである。具体例として挙げられているのは、「風景の美しさ、建築装飾や絵画の表現、論文の出来映え、第三者の行動、数や量の関係、宇宙という偉大な装置がひみつの歯車やバネを使って未来永劫繰り出すさまざまな現象など⁹」である。ところが当事者や観察者の感情は、このような「固有の関係」がない場合でも揺れ動く。風景の美しさや科学技術による進歩発展を目の当たりにしたときなどは、一般的に誰でも感情が動く。そして他者とその感情の動きを共にする。それでもアダム・スミスは、当事者、観察者とも相手と立場を交換する必要はない、すなわち共感が必要とされないというのである。

この点に論及していた新村は、特定の状況におい

て共感を必要としない理由について、「当事者と観察者の感情とが直接に比較可能である¹⁰」ことを挙げている。しかし、新村の場合は、是認についての根本原理を共感ではなく感情の一致であると論じるにとどまり、それぞれの状況についての詳述は行われていなかった。そこで本論では、この共感を必要としない状況と、共感を必要とする状況とを比較検討することを通して、状況の相違について明らかにする。そのうえで、あらためて『道徳感情論』においてアダム・スミスが考えていた共感についての論考を試みたい。

共感を必要とする状況

まず、適否の判断を行う状況にみられる二種類のうち、共感を必要とする状況、すなわち「固有の関係」がある場合から検討を始めたい。共感を必要とする「固有の関係」の具体例としてアダム・スミスは、「私の身に起きた不運や加えられた危害を私と同じように友人が感じる¹¹」を挙げている。すなわち、当事者に責任がないにもかかわらず（あったとしても軽微な責任）、直接降りかかる悲劇的な行為や出来事によって当事者の感情が大きく揺さぶられたときに、観察者の感情が否応なしに揺さぶられるときに見られる関係である。

このような状況のときに、もし共感しない（されない）という事態が生じたとする、たとえ友人とのあいだであっても、次のように深刻な状態を招いてしまうことをアダム・スミスは警告する。

友人が私の不運をまったく思いやろうとせず、私の心を締めつける悲しみにすこしも同情しない場合、あるいは私に加えられた危害に対して怒りを示さず、私の抱く復讐心をすこしも分かち合おうとしない場合には、もはやその問題について言葉を交わすことすらできまい。私たちは互いに相手を我慢できないと感じる。そしてこちらはもう友達ではいられないと感じるし、相手もそう思うだろう。相手はこちらの度外れの情念に当惑し、こちらは相手の冷たい無関心に憤慨することになる¹²。

社会の中でしか生きていけない人間にとって、上述のような関係性の悪化は好ましいとはいえず、今後のことも考えればできるだけ避けなければならない。だからこそこのような状況は、感情の一致を目指す営みを必要とするのである。

しかし、共感が必要だとわかっていても、観察者が当事者と同じ強さで感じることは難しい。共感が必要な状況では、往々にして当事者の方がはるかに強く心を動かされていることから、観察者（友人）が当事者と同じ強さで感じることは見込めない。さらに観察者の場合、どのように努力したとしても、共感を呼び覚ます立場の置き換えが想像上のものであるという意識は密かに潜入してくることになる。そのため感情の強度や質は、観察者と当事者とは相当異なるものになる。さらに、せっかく観察者に感情が湧き上がってきたとしても、先と同じく密かに潜入してくる意識により、それは長くは続かずすぐに鎮められることとなる。

そのような結果になることが分かっている、アダム・スミスは、観察者にはできるだけ相手の状況に自分を置き、状況をできるだけ詳細に自分自身に引きつける努力を求め、当事者に対しては、観察者が同調できるように、自分自身の感情を抑えなければならないと主張するのである。なぜならば、そのように両者の感情が違っていても、「社会の調和を保つには十分な程度に一致している¹³」からである。つまり、当事者と観察者の完全な感情の一致は求められていないのであり、アダム・スミスが現実的な方略を提示していたことがわかる。

さらに特徴的なことは、アダム・スミスは、観察者だけでなく当事者にも相応の努力を求めているということである。一般的に共感が必要な状況において、姿勢や努力が問われることが多いのは観察者である。しかし、アダム・スミスは明確に当事者にも一定の努力を求めており、次の引用文にも見られるように、それこそが、当事者の最も希求している共感を得られる方策になるというのである。

つらく激しい情念にとらわれている当事者にとっては、観察者の心に浮かぶ情があらゆる点で自分と同調しているとわかることだけが、唯一の慰めとなるのである。だがその願いが叶うのは、観察者が同調できるような程度まで当事者が自分の情念を抑えたときだけである。

このように、共感という事象を考えるとアダム・スミスには二つの特徴的な姿勢が見られる。一つは、常に当事者と観察者の相互作用を念頭に問うており、さらにはそうした相互作用の関係性が網の目のように展開している社会を考えていることである。もう一つは、アダム・スミスにとって共感とは、

決して当事者と観察者の感情の完全な一致だけを指しているわけではないということである。

共感を必要としない状況

つぎに、是認の判断を行うときに共感を必要としない状況、すなわち「固有の関係」がない場合とはどのような状況なのかについて論じていく。先に見たとおり、アダム・スミスが用いている共感は、当事者と観察者の完全な感情の一致だけを指すわけではなく、それぞれの感情の強度や質に違いがあったとしても、社会の調和を保つのに十分な程度の一致も含むほどに広い概念であることが明らかにされていた。しかし、その広い概念である共感を必要とせず、かつ相手と立場を取り替えてみる必要もなく、しかも同じ状況にある二人の感情が一定程度同じように揺さぶられる場面というのが「固有の関係」がない場合ということになる。

前節の「固有の関係」がある場合と比較して考えると、感情を動かす事案が、当事者に降りかかる悲劇的な行為や出来事ではないということになる。具体例としては、先述したとおり風景の美しさや絵画の表現、数や量の関係など、さまざまな現象であり、「科学や鑑賞の対象となるもの¹⁴」、つまり降りかかってきた出来事のように、当事者の感情を揺さぶることで観察者の感情も揺れるというようなものではなく、美しさや卓越した科学的知見や技術などに対する感嘆や驚きなど、人間の感情が直接動かされるものを想定しているのである。こうしたものをアダム・スミスは、「明白でわかりやすく、おそらくは誰もが自分たちと同じ感情を抱くと考えられるもの¹⁵」と呼び、それらに関する限り、感情や心の動きを他者と一致させるために、共感を必要としないというのである。

しかし、一般的には、誰かと一緒に美しいものを見たときや卓越した技術などに触れて心が動いたときなど、その状況を共有し、同じように感情が動いた他者と私たちは、「共感した」ということも可能なはずである。ところがこうした状況に関して、アダム・スミスは、「友人の感情が自分と一致した場合、もちろんそれを是認するにちがいないが、称賛し感嘆すべきだとは考えないだろう¹⁶」と論じ、是認について触れているだけなのである。

すなわち、その時に他者と共に動いた感情については、これまで用いてきた共感とは別のものとして扱うのである。しかもこのように共感と分ける理由

については、「同じものを同じ視点から見¹⁷」からであると簡潔に論じるだけなのである。これらのことからアダム・スミスが共感を必要としないというのは、その状況では、各人の感情は直接対象に動かされており、そこでの是認には他者は介在していないし、他者の立場に入り込む必要もないからではないかと考えられる。

ところが、同じように科学や鑑賞の対象となるものに触れたときであっても、他者が自分の感情に影響を及ぼす場合もある。その例としてアダム・スミスは次のような場面を紹介する。

(彼の感情が) こちらの感情を導き高めてくれるような場合、すなわちこちらが見落としていた多くの点にも注意を払い、対象のすべての面とつりあった感情が形成されていると思われた場合には、私たちは是認するのみならず、卓越した正確さや理解力に驚嘆し、大いに感嘆し賛美すべきだと考えるにちがいない。¹⁸

アダム・スミスは、このような場合の具体例としてすぐれた審美眼を持つ人や、経験を積んだ数学者など学問や芸術分野の偉人を挙げている。要するに彼らの卓越した識別力や正確な理解力に対しては、「是認するのみならず(中略)大いに感嘆し賛美すべき¹⁹」であるというのである。

ここで驚きという感情表現をアダム・スミスは用いている。とくに、驚きによって是認は強められ、「感嘆と呼ぶのがふさわしい感情を生み、自ずと賛美という形で表現される²⁰」と論じている。感嘆され賛美されるのは、科学や鑑賞の対象と、それらを介して、卓越した審美眼によって表現したり、正確な理解力で難問を解答したりする偉人たちも含められると考えられる。そして彼らによって、自分を含めた人びとは、驚きとともに感情が揺さぶられ、その感情自体は高みに導かれていくと論じているのである。

くわえて、知的な才能や業績を生み出す資質について、それらの効用から是認し感嘆すると考えがちであることを戒めている。もちろん、科学や鑑賞の対象自体は役に立つという価値観で見ても高く評価されるであろう。しかし、そうした効用によって是認しているわけではないことをアダム・スミスは主張する。これらの学問に対する私たちの是認という判断は、それそのものが「正しく確実に真理と現実と一致する²¹」ことから直接下されており、それは

審美眼も同様であるというのである。

ここまで共感が必要ではない状況を概観してきて特徴的なことは、アダム・スミスが、美しさや学問については、人間がその作品や作者などから直接感情を動かされると考えていたということである。そのため他者を介することなく感受することが可能であり、他者と立場を交換するような共感を必要としないのである。

さらに、その卓越した知や美しさを是認し感嘆するというとき、感情が一定の働きを行っていることに着目し、それによって高みに導かれ、啓かれていくということにも言及していることである。

考察

ここまで『道徳感情論』における適否の判断を行う二つの場面、「固有の関係」がある場合と「固有の関係」がない場合、言い換えるならば共感を必要とする状況と共感を必要としない状況を比較検討するところから、アダム・スミスの共感論についての分析を試みてきた。そこから浮かびあがってきたことは、まず「固有の (peculiar) 関係」とは、共感という機能を有した人間特有の関係をも含意していると考えられるということである。すなわち、社会で生きていかなければならない人間に固有の関係であり、他者との関係、あるいは他者を介した関係という意味が含まれていると言えるのである。

つまり、人間は共感という機能によって、相互に他者の存在や振る舞いによって影響を及ぼし合うように、自然 (Nature) によって創造されているということである。相互作用であるので、当然ながら当事者と観察者の双方に感情の影響は及ぶことになる。また、その感情の表出については状況における適否の判断も受けることになる。利己的な面もありながら、利他的でもある人間が、社会の一員として生きていくために、状況に応じて社会に受け入れられるレベルにまで感情をコントロールすることが双方に必要であると考えられるのである。

そのうえで、出来事の当事者と観察者の感情が非対称であることは、避けられないという事実をアダム・スミスが受けとめていたことを示した。そこからあらためて、人間はそれぞれ違う感情を抱く存在であり、それゆえお互いに一定の配慮を必要とする論じるのである。しかも、その配慮が行き届かない場合には、社会関係を毀損するほどの力を共感には有しており、だからこそ、その力を他者との関係維

持や構築の方向に制御していく必要があるとアダム・スミスが論述していたと考えられるのである。

また、対比的に共感を必要としない状況も論じることで、科学や鑑賞の対象などから感情が動かされることにも焦点をあてていた。その状況では、科学や美しさを体現する対象から、直接私たちの感情が働きかけを受けているため、基本的に他者や他者感情の介在、すなわち「固有の関係」は必要ないということになる。仮に自分とは別の人が、同じ状況にいたとするならば、自ずとその他者も同じ対象から同じように直接的な感情への働きかけを受けていることになる。それゆえ、わざわざ他者の立場に入り込んで、状況を確認する必要はないのであり、共感を必要としないという言明にいたるのである。この意味で考えれば、他者の感情と自分のそれとを比較する必要がないという解釈の可能性も浮かびあがってくる。つまり、同じものを同じ視点から見るとするのは、その対象物を見たときには誰もがその対象物から直接的に感情を動かされているということであり、人間にはそうした機能が備わっているといえるのである。

しかもそうした直接的な感情への作用は、自分にとっての効用のようなものからではなく、卓越した人が表現する真理や正しさ、美しさによって直接感情が動かされるというのである。すなわち、科学や美に導かれるということについては、それが単に役に立つからではなく、その真理や美しさによって私たちがこれまで気づかなかった、あるいは至ることができなかった視点に導かれるからである。それゆえアダム・スミスは、真理の修得や学びという認知的機能について、感情と切り離して考えていないし、むしろ感情がそれらを導いているかのように考えていたと思われるのである。

まとめ

本論では、アダム・スミスの『道徳感情論』における共感を論じてきた。とくに適否の判断が必要なときの二つの状況、すなわち共感を必要とする状況と共感を必要としない状況の比較を行った。共感を必要としない状況とは、科学や鑑賞の対象となるものである。しかし、美しい風景や技巧を目にしたときには、誰でも感情が揺れ動くにもかかわらず、それを一緒に見て感動したとしても、そこには共感が必要ないというアダム・スミスの主張を扱った。

まず、共感を必要とする状況からは、アダム・ス

ミスの共感に見られる二つの特徴を示した。一つは、共感とは、決して感情の完全な一致だけを指しているわけではないということである。当事者の方が観察者よりも強く心を動かされることが一般的であるけれども、ある程度の強さの違いがあったとしても、観察者が共感することは社会の調和を保つ上で重要だからである。もう一つは、人間が生きる社会を前提として、感情の相互作用性に焦点をあてていることである。この点については、先述と同様に社会の調和という観点から、当事者にも観察者が共感しやすくなるように感情を抑えるよう、相応の努力を求めているのである。これらのことから、アダム・スミスの用語である「固有の関係」には、社会を営む人間に特有の他者との関係という意味が含まれることを示唆した。

つぎに共感を必要としない状況からは、科学や鑑賞の対象となるものからは、他者を介さずに直接感情が揺さぶられるように、人間みな同じように自然によってつくられているという点で、共感を必要とする状況と区別されていることを示した。それゆえ、あえて他者の視点に立つことを求めるような共感はいらないとアダム・スミスが言明していたということを論じた。また、科学や美に直接感情を動かされるということからは、私たちが真理を希求し修得しようとするのが感情であるという可能性について論じた。

これらの比較と論考を通して、自然 (Nature) により人間は、他者の感情や存在と相互作用を及ぼし合うように、創造されており、その鍵となる概念の一つが共感であるとアダム・スミスが考えていたことを示した。そして社会で生きていかなければならない人間は、状況に応じて社会に受け入れられるように共感という機能によって、自分の感情をコントロールすることが求められていることも示した。

しかし、本論で扱えたのは『道徳感情論』における共感の一端に過ぎない。中立な観察者や状況など他の重要な概念と共感の関連については論旨の都合から一部しか触れることができなかった。今回触れられなかった論点については、他日を期したい。

注

- ¹ Smith, Adam 2001 *The Theory of Moral Sentiments.*, Penguin Classics. (TMS), p. 103. = アダム・スミス, 村井他訳 2014『道徳感情論』日経BP社, 221頁.
- ² 例えば水田洋 1997『アダム・スミス』講談社学術文庫, 70-71頁. など
- ³ TMS, p. 103. =221頁.
- ⁴ 濱田義文 1991 イギリス市民社会の倫理, 日本倫理学会『イギリス道徳哲学の諸問題と展開』慶応通信, 205頁.
- ⁵ TMS, p. 16. =62頁.
- ⁶ *Ibid.*, p. 16. =63頁.
- ⁷ 佐伯胖 1980『決め方の論理』東京大学出版会, 226頁. なお、佐伯はこうした理解ともいえる状況的な共感のありかたを「認知的共感論」(同書で佐伯は水田洋訳『道徳感情論』を用いているため原文は「認知的同感論」と呼んでいる。
- ⁸ TMS, p. 19. =69頁.
- ⁹ *Ibid.*, p. 24. =80頁.
- ¹⁰ 新村聡 2009 アダム・スミスの共感論と公平な観察者論, 『経済学史会第73回大会』, p. 26. (<http://jshet.net/>). なお新村は、「是認の根本原理は観察者と当事者の感情の一致であって、共感ではないことに注意しなければならない」、また続けて、「もし観察者と当事者の境遇が一致していれば、共感がなくても感情の一致による是認は可能である」と論じている。このことから明らかなように新村は、共感と是認とを区分したうえで、力点を是認に置いているところも本論とは異なる。
- ¹¹ TMS, p. 27. =82頁.
- ¹² *Ibid.*, p. 27. =83頁.
- ¹³ *Ibid.*, p. 28. =84-85頁, このあとに「両者の感情は同じ音を奏でるのではないにしても、協和音にはなっており、社会で望まれるところは十分に満たしている」とつづくのである。
- ¹⁴ *Ibid.*, p. 25. =80頁.
- ¹⁵ *Ibid.*, p. 25. =80頁.
- ¹⁶ *Ibid.*, p. 25. =80頁.
- ¹⁷ *Ibid.*, p. 25. =80頁.
- ¹⁸ *Ibid.*, p. 26. =80-81頁., () 内は論者が加筆.
- ¹⁹ *Ibid.*, p. 26. =80-81頁.
- ²⁰ *Ibid.*, p. 26. =81頁.
- ²¹ *Ibid.*, p. 26. =81頁.